

優秀賞

24歳の私へ

岩手県釜石市立釜石中学校

2年 照井 妃奈

2008年5月31日、午後12時7分に3,056グラムで私は産まれました。小さいころの私の性格は天真爛漫で、いつも飛び跳ねてばかりだったので、よく母に怒られていたそうです。

しかし、私が1歳5カ月の時、突然左眼の病気が見つかりました。病名は「網膜芽細胞腫」という、15,000人に一人の確率の小児がんでした。命に関わる悪性腫瘍です。抗がん剤治療と眼の治療を毎月するか、眼の摘出手術をして義眼にするか、どちらかの選択をするしかなかったそうです。先生からはどちらを選んでも病気に終わりはないと言われましたが、それでも母は私の眼を残してあげたいと思い、岩手から東京の病院に毎月、新幹線を通う決意をしました。通い続けていく中でつらいこともあったそうです。治療をするために我慢しなければいけないこともあり、幼稚園に行ける日がとても少なくなりました。しかし、たくさんの先生、看護師さんに助けてもらったこと、入院した時に部屋が一緒だった子どもたちと友達になったこと、たくさんの感謝することがありました。何度も涙を流した分、たくさんの人たちとの出会いやありがとうございました。小さいころの出来事だったので、私はあまり記憶にはなく、母からよく話を聞かされていました。母は、

「誰かに何かをしてもらったら、ありがとうは必ずだよ。」

が口癖で、私はいつも母に言われています。言われるたびに心の中で「わかっているよ！」とつい思ってしまうのですが、今考えてみると小さいころ、たくさんの人に助けられて感謝の思いを持ったことがあったから母はうるさく、何回も言っているのかもしれない。

2011年3月11日、東日本大震災が起こり新幹線が止まったため、眼の治療ができなくなりました。新幹線の再開を待ち続けて約2カ月後、やっと東京の病院へ治療に行くことができました。しかし、私の左眼には前回治療で消えていたはずの腫瘍がまたできていました。恐れていた「再発」でした。もうこれ以上眼を残すための治療はできないと先生が判断をし、私が5歳の時に左眼の摘出手術を行い、義眼になりました。母は長期間の治療に後悔したそうです。

当時、母は私の顔を見るたびに悲しくて悔しくて、今までやってきたことが無駄だったんじゃないかと、何度も泣きました。私は鏡を見て、自分の左眼がなくなっていることに気づくと大泣きしてしまったそうです。しばらく私が描

いた絵は、左眼を黒く塗りつぶしたものでした。私はその話を聞いて、涙が止まりませんでした。母は後悔していると言っていました。私は母の判断は間違っていないと思います。私の病気に真っすぐ向き合い判断し、今も病気のことを考え、病気に負けないようにいつでも応援してくれる母には感謝の気持ちでいっぱいです。

去年、私が一番最初入院した部屋で友達になった女の子が天国へ旅立ちました。なんだか、とても複雑な気持ちになりました。これからも、たくさんの人に支えられ、今まで生きてこられたことを当たり前と思わず、感謝しながら友達の分まで生きていと改めて思いました。

私には将来の夢があります。それは、人を助ける仕事に就くということです。なぜかという、自分が今までたくさんの人たちに助けられてきたので、今度は私が周りの人たちを助け、勇気づけるために働きたいと思ったからです。まだ、具体的に、やりたい仕事は決まっていませんが、これから人を助ける仕事について勉強し、その仕事について詳しく知ってから、自分がやってみたいと思った仕事に進みたいです。

最後に、24歳の私へ。

あなたは今、何をしていますか。先ほど書いた「人を助ける仕事」に就いているのでしょうか。14歳の私は病気に負けず、部活も勉強も一生懸命頑張っています。たまに母とぶつかることもあります。充実した毎日を送っています。今の私には10年後の自分なんてまったく想像できません。14歳のころの夢を持ち続けてかなえたのかもしれない、夢はあきらめて違う道に進んだのかもしれない。どちらにしても、自分を助けてくれた周りの人たちや家族などには、「ありがとう。」

を必ず伝えてください。「必ず」です。

これからも、私のために一生懸命助けてくれた人たちに感謝の気持ちを忘れず、さらに感謝される人にもなってください。

14歳の私より。